

---

# 残酷な女神・拓己

かなこ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

残酷な女神・拓己

### 【Nコード】

N9524B

### 【作者名】

かなこ

### 【あらすじ】

拓己12歳。思春期のはじまった彼はある日屈折した暴れ者サミュエルに出会った。粗野な「星の王子さま」サミュエル」と可憐な「オーロラ姫」拓己」。ふたりは全く違った個性と境遇で生きてきたのに、強く惹かれあう。そして15歳になった彼らはロサンゼルスからフィラデルフィアへ旅をする。

サミュエルの心に追随する拓己と、拓己を純粹に守ろうとするサミュエル。しかし、育った環境の違いは、大きな隔たりとなって彼らを無残に引き裂く。そして事件は起

きる。アメリカを舞台に少年たちの成と生と性が交錯するロードムービー「残酷な女神」第2説。

## 12歳の出会い（前書き）

「残酷な女神」第1説（完結）はこちら <http://ncode.syosetu.com/n9414b/>

## 12歳の出会い

「あ…」

強い快感のあと急速に下降する脱力感。

またやってしまった…

僕は自分自身の行為に恥じ入るだけだった。体の奥からどくどくとしたものが次々に沸いてきて、それに絡めとられてしまう。

…これが女性との行為なら「愛」とやらの結びつくのだろうか？  
僕は全く不気味であった。

- - - - -  
- - - - -

「やっぱり自分でするとき、想像するなら、胸とお尻の愛撫度合いが集中している？それとも相手をよがらせてることが興奮をさそう？」

今日の朝食はめずらしく母がいる。朝から、こんな会話はうちではめずらしくない。彼女は性については、ほとんど「研究家」なのだ。僕は真っ赤になる。まだ15歳の僕にとっては、行為を見透かされたいで最も避けて欲しい話題だった。

「そんなこと答えたくない」

「まあ、いいけど。自分のセクシュアリティを考えるのはすごく大

事よ」

恐ろしいのは、彼女の口調が非常に色っぽいことだった。そのため僕は母親に反抗する少年になろうとしても、いつもくじかれてしまう。ちよつと反則のような気がした。

「おもしろい本持ってきたの！ほらっ」

指指したテーブルには、数冊の本がつまれていた。

「うん。分かったよ」それはいつものパターンだった。

- - - - -  
- - - - -

「もっと強くなつてからかかって来な、ベイビー」

地面に突っぶしたエリックにむかつて、サミュエルは、得意げに言い放った。いつもは、やられていた僕たちが言われていたセリフなのだ。

「覚えてろよ！」

エリックたち3人は、腰をさすりながらヨタヨタと駆けていった。

「いえーい！！！」「やったぜー」「ばーか、ばーか」僕たち4人組は手を叩きあつて喜んだ。

気の弱いちよつと太ったロイ、黒人で目の愛らしいディビット、そして僕とサミュエル……なぜか僕たちは友達だった。

サミュエルに出会つたのは3年前の12歳の夏だった。ホワイト・アングロサクソンの彼は金髪を短く刈り込んで（3分刈りという表現が日本的？）捨て猫のようなブルーグレイの眼をもった少年だった。不遜なオーラは、初めていった柔道教室ですごく目立っていた。

「オマエ何か他のスポーツやってるだろ」

はじめて受け身の練習の相手をしてもらったばかりなのに彼は僕がバレエを習っていることを見抜いた。

僕は言いたくなかった。低所得の子弟も多く通っている柔道教室に、プレップ・スクール（有名私立の進学校）に通い、習い事に明け暮れていた僕の境遇を話したくなかったのだ。少年とはそういうものだ。いい子であるより、不良であるほうに憧れる。

「何してるんだ？」

サミュエルは結構しつこかった。

「バレエだよ」

あきらめて答えた僕は、絶対にカラかわれると思った。しかし彼は意外な反応をした。驚き見開いたブルーグレイの眼に暖かい光を宿していた。

「踊ってみてくれよ」

「え?!」

「バレエを踊ってみせろ、って言ったんだよ」  
あまりに驚いて僕は

「こんなトコで?! 絶対嫌だ!ここは柔道の教室だ!」

「じゃあ、おまえの家に行くから」

「????」

全くもって分からなかった。彼は僕をいじめるために柔道教室の皆の前でバレエを躍らせたわけではなかったのだから。

僕の家に入ってからサミュエルは黙ってしまった。

恐らく家の家具や作りが彼の家と全く違った世界であったことによる、驚き・羨望・嫉妬・怒り……といったものによるものだろう。

リビングは1000スクエアフィート（93平方m）しかないが、練習をする僕の為に半分は家具を置かない形になっていた。一面の鏡とバーが少し普通のリビングとは違うがアップarmiドルクラス（上流の中）の家では、それがそんなに気にならない。

最近のお気に入りヨガパンツに着替えた僕は、軽くストレッチをした後、モダンバレエの中でも自然な動きの振り付けのものをセレクトして披露した。

「グレイト！！！！　すごい！！」

興奮してサミュエルは椅子から立ちあがった。

「こんなので、よかったのかな？」

「おお！　かつこいいじゃん！　あんな動き出来たら、どんなダンスだって簡単にマスターできる！」

確かに。バレエが踊れたらヒップホップもタップもそんなに難しくないだろう。

「けどさ、アレ　なんだっけ…クラシック？のも見たい」

「え」

「よく知らないんだけど、ラーラララ　ってこの曲？分かるか？」

「ああ”バラのアダージョ”　眠れる森の美女だね」

サミュエルは音程がしっかりしていたので、ワンフレーズでもよく分かった。

ただ困ったことに、ここで主役の王子のパートはないのだ。16歳



の誕生日を迎えたオーロラ姫が皆に祝福される場面。4人の王子が求婚に訪れオーロラ姫はバラの花を次々と受け取る。という場面なのだ。

「オーロラ姫は踊れる？」

「もちろん」

そのままCDをチャイコフスキーに替えて、ローズ・アダージオ流す。

相手のいないところを、上手にごまかしながらオーロラを踊る。可憐な16歳のオーロラ。アチチュードのあと、手を高く上に上げ両手でポーズを作るとしつかりとバランスを取って、この場面は終わる。

「どお？」

僕に聞かれて、急に不自然な笑顔を作ったサミュエルに気づいた。

「ああ。よかったよ……」

「少しヘンだったかなあ」

「そんな！ 全然そんなことないよ！ ちよつと綺麗すぎてビツクリしたんだ」

「そお でも、サミュエルがスリーピング・ビューティー（＝オーロラ）が好きだってことはよく分かったよ（笑）」  
ちよつとニガテそうに笑ってサミュエルは言った。

「母さんがバレリーナだったんだ……」

## サミュエル

サミュエルの母は、彼が6つの時に出て行った。父の暴力と無能さに耐えかねたんだ、とサミュエルは言っていた。

じゃあ、どうしてそんなヒドイ所にサミュエルを置いていったんだ？　ということは口が裂けてもいえなかった。それは彼のアイデンティティを根本から揺るがすセリフだからだ。

いま彼はダウンタウンで臨時雇いの仕事をしている父とふたりで生活をしていた。酒を飲んで、時折、彼はサミュエルに暴力を振うらしかったが、柔道を始めたサミュエルは少しずつ抵抗をしはじめていた。

「送っていくよ」

ポーチを出た僕たちは、隣が引越し中であることに気づいた。そういえば今日は新しいお隣がくると聞いていたっけ。

じつとこっちを見ている少女がいた。肩下のブルネットの髪を無造作くくり、長袖のTシャツにジーンズ。

それがローラだった。

ローラと僕は同じ世界の住人だった。父親はある財団の重役、母親は弁護士、3つ年上の姉は有名・私立女子高校に通っているという。ローラのほうは僕と同じ共学のプレップスクールに転校してきた。

行動範囲がよく似ているので、よく話をする機会があったが、独立

心が強く正義感に燃える少女だった。僕の母はそんなローラを気に入ったようで、近所で会った時などは積極的に声をかけていた。ローラの方も母に憧れをもっていたようだ。

「ハンサムでセクシーだね。タクミのお母さんは」

オープンスペースのカフェでローラが言った。今日はチャリティ・バザー実行委員としての話しあいだった。

「そうかなあ」

「かつこいいよ」 憧れちゃう！」

… かつこイイかもしれないが、物心ついた時から不在の母に不満を持っていた僕はローラに微妙な怒りを感じた。

「ローラのお母さんだって弁護士だしカッコいいじゃない？」

「だめよ、マミーは。依頼がくれば悪い人だって弁護しちゃうんだもん」

「それは仕方ないよ。弁護士だもん」

「普通の人みたいなさ言うのね、タクミも。がっかり！」

自分の不満は、ハッキリ言うなあ…

「あたし、最近、あの子 サミュエルによく会ったのよ」

思い余ったようにローラは唐突に言った。

「え？サミュエル？」

「そう」 ピアノ教室の帰り、とか学校の帰りとか、あたしの行動範囲を知っているみたい。なんだか怖いわ。タクミはサミュエルとどういう友達なの？」

びっくりした。

「えっと、柔道仲間…？　ときどき彼の家に集まって皆とマンガ読んだりゲームしたり、楽器の演奏したり…」

「？」

合点がいけないようだ。早くいえば悪友なのかもしれない。僕以外の3人はダウンタウンの幼馴染だが、僕はサミュエルを通じて彼らとつるんでいたのだ。彼らといると、子どもらしくいてもバカにされる事もないし、楽しくて面白いことがいっぱいあったのだ。

「最近はずいぶん忙しくて、サミュエルとは会ってないんだ。　今の話は知らなかった。驚いたよ」

「こんど会ったら、止めるように言っておいて」

「うん…」

理由が知りたかった。

…でも、何となく理由は分かっていた。きっとサミュエルはローラが好きなのだ。けどどうやってアプローチしていいか分からなくてって、ストーカーまがいのことをしているのだろう。

## 境遇のちがい

「今日はいまいち気分がノらない…」

そう言っと、サミュエルはギターを肩からはずした。

ロイとデイビットは残念そうに楽器から手を下ろした。

僕たちはバンドを組んでいたけど、オチこぼれクラブなので練習はサボってばかりだった。ロイはベース、デイビットはドラム、僕は基本はキーボードだったけど、他の楽器もサポートしていた。

「今日は解散しよう」

サミュエルはいつもリーダーだった。

「サミュエル、ちょっと話があるんだけど」

意外そうな顔をした彼は、

「うん…」と答えた。

「じゃあ、オレたち帰るよ。また来週な！」

「練習しとけよ」

デイビットとロイはそのまま帰っていった。

「飲めよ」

冷えた水筒を僕はサミュエルに渡した。中はコーラだった。なぜか今日はコーラを馬に用意してもらった。馬は僕の中国人の乳母だった。

「なんだ？これ？コーラかよ」

「グリーンティとでも？」

「オマエ、日本人ならグリーンティか水だろっ」

なぜかサミュエルといるときは、コーラとかペプシとかジャンクフード類を摂りたくなるのだった。普段食べないのに、このグループにいるとそうなるのだ。バカな話をしながら、つまんでいると最高に楽しかった。

「アレ、弾いてくれよ!」

「OK」

僕はギター（楽器は中古屋で買ったり、貸スタジオでリースをしている）を、取り上げるとジョン・レノンのビューティフル・ボーイを奏で始めた。

サミュエルはこの曲が好きだ。

Every day in every way

毎日 全ての事が

It's getting better and better  
だんだん良くなるんだ

Beautiful Beautiful Beautiful  
Beautiful Boy

美しい、美しい、美しい

「美しいボーイ」

父の息子への愛を歌ったこの歌は、サミュエルにとっても父のいない僕にとっても特別の歌だった。

Darling、Darling、Darling、Darling、  
g...

「…サミュエル！」

声をかけた。本当はそのまま、彼の名前で歌いたかったけど。

「ローラのこと…」

「…」

「どう思ってる？」

「別に」

気ダルそうに答えた。ブロンズがかった瞳の影が横を向くと一層濃くなった。

「よく 分かんないんだ ムカつくような、気になるような。

あんな高慢ちきな女、いつそやつちゃたらどうか、とか」

「」

分かるような気がした。

「でも… そんな事したら、（バンドで）デビューも出来なくなっちゃうよ」

「ふっ」

サミュエルは笑った。

「そんな事本気で言ってるのか？ 俺たちにデビューなんて出来るものか、どうやったって ……こんな才能じゃ出来ない それはおまえが一番分かっているハズだろ！」

「そんな事ないよ！もつと練習すれば可能性はある！」

「本気で言ってるのか？人生は生まれたときから決まっているんだ！才能も金も！不公平なもんだっ！ああ、おまえはいいだろう。」

オマエは才能がある、環境も問題なし、だ！だが俺たちは違っんだよっ」

そんなことない！

僕は声に出して言いたかったけど、どう表現していいか分からなかった。サミュエルの絶望やイラだちを理解しながら、共感はい生まれと育ちを憎んだ。

貧富の差の激しいアメリカで這い上がることは、絶望的なほど苦しい。その辛さ、イラだち、欲望は成長するに従ってサミュエルを襲っていた。

目の前にある僕とローラの存在はサミュエルに決定的な打撃を与えたのかもしれない。

「でも、僕はサミュエルのことは友達だと思っているから…」

「帰れ」

サミュエルは横を向いたまま僕を見ようとしなかった。

僕は貸スタジオのドアを出た。

- - - - -

「母さん、東京に行くの」

数日たった夜、母は告げた。

「へえ。学会？」母は音楽プロデューサーの仕事の他に、女性団体



の活動もしていた。

「違う。東京に帰るのよ。あっちに住んであっちで仕事をするのよ」  
「？」

あまりにも突然で何を言っているのか分からなかった。

「東京で何をするんだよ？」

「あっちでスターを育てるのよ！」

母は上気した顔で答えた。

「拓己も一緒に来てくれないかしら」

!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

「い、嫌だよっ！……それにスターって何？日本でも音楽プロデューサーするつもりっ？」

「もちろん。事務所を構える予定よ。それに、日本に、そろそろ帰りたいと思っていたの」

それは

大きな郷愁であつたろう……

16歳で日本を離れてひとり大きなアメリカで戦ってきた母。父との死別、仕事、つきあつた男たちとも結婚することなく、女手ひとつで僕を育ててくれた母。

異国での生活はどんなにかハードだったかしれない。

改めて母の強さ 意志の強さ、学ぶ力、なみなみならぬ努力にひれ伏したくなるような感慨を覚えた。

「 うん。分かったよ 考えてみる。でも、行くとしても、すぐには無理だからね」

「ごめんね、拓己。」

「お母さん勝手なことばかりしてきて

無理して東京に来なくてもいいわ。あなたはこっちで育ったんだし、せつかくプレッブスクールにまで通ってるんですものね」

「スクールだけじゃないんだ…」

僕は2年とび級をしているので進学に対してはそんなに気にならなかった。

サミュエル

ロイ、デイビット

スクールの校風や行事、友人たちもそれなりに気にいつていたし、バレエやヴァイオリンのレッスン、ボランティアサークルのことも気になった。

頭をもう少し整理しないと答えは出なさそうだった。

- - - - -  
「いい子にしててね」

ぎゅっと抱きしめてくれてから、ママは必ずその後おでこにキスしてくれた。

それが嬉しくって

「やだやだ！いい子にしない！ も1回抱っこして！」

小さな僕は何度もせがんだ。

母は時間に急かされながらも、何度も抱擁とキスをしてくれた。最後には、聞き分けのない僕は、叱られてしまう。

「坊ちやま、馬と遊びましようね」

馬になだめすかされて、あきらめる、というパターンの繰り返しだった。

そして、今度も

「いい子にしててね」

おでこにキスをして母は東京へ旅立ってしまった。

## 冒険

母が東京に旅立った日の夜、サミュエルから電話が入った。

「タクミ… オレ、ロスを離れるよ…」

僕は血相を変えてダウンタウンに走った。

「親父と大喧嘩しちゃった… 殴ってきたんで、こつちも殴り返してやったんだ。もう最後には“出てけっ”て言いやがるもんだから“出てっつてやる”って。飛び出してきちゃったんだ…」

公園の入り口でサミュエルはぼんやりと塀に腰をかけていた。

「サミュエル！」

よかった！居た！

「タクミ…」

切れた口元を引きつらせて微笑んだサミュエルは、悲しいほどに美しかった。

「（顔以外）どっか打ってない？」

「ああ… オレはクロオビだから（笑） 本気でやりあったら親父なんて簡単だよ。最初は殴られてやってたんだけど…」

アンバランス… 15歳の白人の少年は体格は大人よりも強かった。だが社会的には全く非力だった。

「僕の家においでよ」  
「いや」

電話で最初に聞いた言葉を思い出して僕は恐怖を感じた。『口スを  
離れる』サミュエルはそう言った。

「どこに行くの」

震える声で訪ねた。

「フィラデルフィア 母さんがいるんだ」

近所のおばさんから聞いたことがあったらしい。サミュエルのお母  
さんがフィラデルフィアで生活している、という事を。彼はその婦  
人から、連絡先を聞き出していた。

「…わかった でも、僕も一緒に行く」

キツパリと言った僕にサミュエルは心底驚いていた。

「一緒にフィラデルフィアに行くから。お母さんが見つかるまでつ  
いていく！」

空には小さく星が輝いていた。

- - - - -  
- - - - -

インターステートハイウェイは全米を縦横に入っている高速道路。  
僕たちはお金がないので高速バスを利用することに決めた。僕の家  
はお金に困っていても僕は現金を持っていない。いつもは馬<sup>ウマ</sup>が  
大きな買い物の支払いをしてくれるからだ。手持ちの小金をかき集  
めてポケットに入れた。

東西の大陸横断路線は、ロサンゼルスからメキシコ湾岸を経由してフロリダのジャクソンヴィルへ抜ける Interstate 10。そこからアメリカ大陸を上上がる形で Interstate 95にのる。東部の有名都市をそのまま網羅する I - 95 は途中フイラデルフィアも通過する。

朝 8 : 00 出発。夏休みにも入っているため少し乗客は多いようだ。僕たちは中央より少し後ろ側の席に座った。

市外の車窓を眺めていたサミュエルも僕も、しばらくすると砂漠とか渓谷と岩の台地が延々と続く大地ばかりになると見飽きてしまった。

僕は昨日からちよつと熱っぽかったが、だんだんと気分も悪くなってきた。マズい…

「ごめん、サミュエル　ちよつと僕、酔ったみたい」

「え？　ああ、本当だ。顔色悪いぞ　えーと、確かここに」  
エチケツトバックの代わりを探そうとしているようだが、なかなか出てこない。

「いい　ちよつとこうやっているとよくなると思うから」本当は酔ってなくて熱っぽいんだ。サミュエルの肩をかしてもらうことにした。…ちよつとヤバい光景だけど、まあ、誤解されてもここは西海岸だから（笑）

いつのまにか眠っていた。

え？

「タクミごめん！　ちょっと！！！」

不意にサミュエルは立ち上がってトイレに行ってしまった。

僕はひどい事に肩どころかサミュエルの膝まで倒れていたのだ。そして彼のペニスは反応してしまったのだ。

ちょっと　、　いやかなり、

大変だよ　ね　この年頃ってさ。

エレクト自体あんまり意味なんかないんだ。

「あー　ごめん」

帰ってきたサミュエルは地べたを見ながらでしか話が出来なかった。

## 身体の支配権

「いいよ そんなの。 よくあることさ。 サミュエルは悪くない。 僕が悪いんだ なにも膝まくらまですることは無かったと思うよ（笑）」

「だってタクミがツラそうだったからさ。 オマエ、熱あるんじゃないか？ 熱かったぞ」

「ちよつとね 風邪ひいたのかもしれない。 でももう大丈夫だよ。 ずいぶんとラクになった」

「 ならいいけど」

心配そうにサミュエルは言った。

しばらくしてからサミュエルが口を開いた。

「なんでこんな体になってしまうのかなあ。 ペニスに人格を支配されてるみたいだ」

「うーん、それが第二次性徴だとしたらヒドイと思う。 頭が付属品だもの。 主導権を下半身に握られていて、普通の生活もままならない！ それを知らぬ顔して学校行ったり、女の子と話すなんて無理があるよ」

「このウズウズした感じを収めるにマスターベーションかSEXの2つしかないのか？ …… なんか、嫌だな」

「それは僕も同じだよ。 終わった後の嫌悪感は何ともいえない」

話題が話題なので声のトーンを低めた。

「この間読んだ”野生人の研究”では、マスターベーションもSEXも知らなかった野生児は性欲らしきモノが起こつても、ウロウロ、



ソワソワするしか出来なかつたらしいよ」

「本当か？」

「じゃあ、方法を知ってるからオレたちはこんな事しちゃうんだろ  
うか」

「じゃない？マスターベーションもSEXも所詮、文化なんだよ。  
誰かから形を教えてもらうからやってるんであって、方法を知らな  
いと出来ないかもね」

「うーん… そうなのかなあ… でもペニスがエレクトしたら普  
通気になつて触るだろう？それがマスターベーションを発見するこ  
とに結びつかないともいえない」

「だから、そのエレクト自体が自然なのかどうか追求できてない  
んだよ。僕はまだ」

「オマエそんなこと真剣に研究してるの（笑）」

「母さんが、そういったことばかり研究するんだよ」

「はははは…面白いよな。オマエの母さん。じゃ、彼女に聞いてみ  
れば分かるかもな」

「嫌だよ！ 恥ずかしい！」

「？そおかあ？ これ言っちゃあタクミ怒るかもしれない  
けど、彼女のSEXセラピーをぜひ受けてみたいよ」

「あの人、変な色気があるからね」

「…タクミと似てるしね…」

最後にボソツと言ったサミュエルの言葉がしばらく頭を離れなかつ  
た。

## 本当に大事なもの

夜7時。僕の体調があんまりよくないので、フラッグスタッフで一泊することにした。ルート沿いのモーテルを選ぶ。

未成年はやばい。だいたいアメリカという国は子どもに旅もさせてくれない。下手したら親は逮捕されるのだ。もちろん未成年者同士の宿泊も禁止されている。

まず事務所にいる人物を遠くからチェックする。しっかりしてそうな人物のモーテルはバツ！あるモーテルは、おばあさんが係りだった。僕は童顔すぎるのでサミュエルに事務所に行ってもらう。サングラスをして、精一杯大人のふりで…

ヤバいなら、走って逃げよう！

けど、大丈夫だった。

おばあさんは目が悪いのか、背が高く柔道をして体格のいいサミュエルを疑わなかったらしい。よく見ると、顔やボディラインが子どもなんだけどね（笑）

アメリカのモーテルはほんと、安価なホテルとしてよく利用される。1泊2000円〜3000円ってトコかな？食事は基本つかない。

「はあ〜！」

「つかれたあー」

二人ともベットに体を投げ込んだ。

「サミュエル、僕シャワー浴びるよ。今休んだらもう起き上がれないから。僕のデイバックから何か出して食べておいて」

「OK！ 腹へった」

- - - - -

ボタン

小さくドアに閉まる音がした。  
サミュエルがベットにいない。

時計を見ると3時。こんな時間にどうしたんだろう？

このモーターは前に庭があつて、大きな木が植わっている。その前にサミュエルは立って木を見上げていた。

… 声がかけれなかった… 見てはいけない彼の心の表情をみたようだったからだ。

いつもの勝気な瞳の色が、子供の表情のようだった。広い宇宙にひとり、ぽつねんと取り残されたような、でもそれで満足のような顔だった。

彼の表情がフツと現実に戻った。

「サミュエル」

僕は今来たように声をかけた。

「ああ、どうしたんだ？」

「それはこっちが聞きたいよ（笑） 木見てたの？」

「ん。これはバオバブみたいだな、と思って」

「え？」

その木は全然バオバブとは似ても似つかなかった。

「あのオーストラリアとかにある？」

「う…ん… いや、”星の王子さま”に出てくるバオバブだよ」  
「？」

「形は全然違うけど、そんな気がしたんだ。 オレはこの先どうしたいんだろう？ 本当に母さんに会いたいのかな？」

「」

「”星の王子さま”はよく読んでもらったんだ。けど、いつも訳が分からなかった 分かったのはバオバブが恐ろしい木だったことと、主人公の僕が飛行機に乗っていた、ってことだけ。王子さまはどうなったんだろう？」

僕は怖くて王子さまの結末を教えることが出来なかった。確か王子さまはヘビに咬まれて死んで星に帰るのだ。

サミュエルはお母さんに会うことに恐れを抱いているんだ。自分を捨てた母親に会うなんて、怖くない訳がない。バオバブの恐ろしさは彼の心の象徴みたいだ。

「友達になったキツネは王子さまに言うんだ。”いちばん大切なものは目に見えない”で。でも象徴的すぎてよく分からないよね」

「ああ、そのセリフはよく聞くな」

「その後読むとちよつと分かるんだ。主人公の”僕”と王子さまは砂漠の中に井戸を見つけるんだ。その井戸の水はふたりにとってた

だの水じゃなかったのさ」

「すごく元気になる水だったとか？」

「違うよ（笑） ふたりが過ごしてきた時間をもった水だったからさ。ただの水じゃない、特別な水なんだ…」

「特別な」

サミュエルはちよつと考えるような顔をした。

「確かにふたりが過ごした時間や親密さはその水に含まれている。けど見えないよな？」

「うん。そうみたい」

僕は微笑んでいた。

そうなんだ、たとえこの旅の先にどんな事が待ち受けていても、僕とサミュエルで過ごしたこの時間は特別なんだ。

「子どもの頃は飛行機乗りになりたかったんだ。だからオレは主人公が飛行機乗りだった事をよく覚えている」

「今もパイロットになりたいの？ サミュエルは？」

「…分からない…」

サミュエルはしばらく黙った。

「自分が何になりたいのかなんて 分からない。今は迷宮ラビリンスの中にいるようだ」

「だめだよ ラビリンスにいたって心でものを見ないと」  
「？」

「座って」

僕はサミュエルに芝生に座らせた。

そのまま背中を合わせて僕も座った。  
顔を見てないのに、近くなれた気がした。

「こうやっていると気持ちがいいんだ」

「…うん」

「安心するんだ」

「うん」

僕とサミュエルが安心できないのは、無条件で愛してくれる人がいない、という事実だった。母はいつも自分を生きるのに一生懸命だったし、どんなに小さな僕に対しても”人間”として接していた。尊重してくれていた、ともいえるけど、盲目に愛してくれている、という感じがしなかった。

僕とサミュエルは、不安でたまらなかったんだ。だから僕たちは双子のようなものだ。

「僕はこの時間を忘れないよ。この先状況がどう変わっても。そのせいでつらい思いをするかもしれないけど」

「オレも… すごく不安だけど、タクミが言っている事は分かる。」

…この木も星空も空気も きっと特別なものになるんだろうな」

「そうだよ。空を見上げたらサミュエルのことを思いだすよ。」星の王子さま”と聞いたらサミュエルの金髪を思い出すよ だから、この時間は特別なものなんだ」

そのまましばらく僕たちは黙って空を見上げていた。

僕たちは”未来”という不安と戦いながら、それでも前に進むのだから。けど、”いま”を生きることも忘れてはいけない。

「タクミは将来何になりたいの？」

「うーん、やっぱり”音楽”がしたいな 何になるのかはよく分からないけど」

「それはいいな」

ほんとはサミュエルたちと組んでバンドデビューしたい、とは、ちよつと言えなかった。また不機嫌になられたら困るから。

「そうだ！サミュエル、日本に行ってみない？母さんが向こうにいったんだ！柔道も禅も本場だよ！」

「にほん？！」

少しサミュエルのトーンが上がる。彼が柔道や日本の武道に興味を持っていることを僕は知っていた。

「うん。費用なんかは母さんに出させてさ、夏休みだし、いちど日本に行ってみようよ」

「うーん、面白そう…」

彼の声に力が宿るのを感じた。

「Mrアキヤマ（柔道の師匠）がよく言ってるブシドーも習えるかな？」

「Mrアキヤマに紹介状書いてもらおうよ。そしたら日本でサミュエルにしたいことも見つかるかもしれない！」

「そうだといいいけど」

「なに？」

「オレ、にほんご、しゃべれないんだよな…」

「ぶっ！？」

「あ、オマエ笑ったなー」

そのままサミュエルは背中をはずして、こっちを向いた。「あー」  
背中をはずされた僕は転がる形になってしまった。

押しつぶされそうな母との再会の不安を胸に、サミュエルの心は少しでも軽くなっただろうか？夜明けの空がしらんでくる気配を感じながら、星たちは遠慮がちに瞬いていた。



## 危険

次の日、僕たちは飛ばした。何をどう思ったか、どうしてか早くサミュエルのお母さんに会う決着をつけたかった。

だから、夜もそのまま深夜走行のバスに乗っていくつもりだった。

イリノイ州スプリングフィールドについたのは夜中の1時もすぎた頃だった。30分…次のバスが出るまでに時間があつた。

お手洗いに出了たのが失敗だった。

僕たちは、たちのよくない連中に目をつけられたのだ。僕の外見が日本人だから旅行者と間違われたのだろう。お金をもっていると思われたのだ。

トイレを出たところで後ろから声をかけられた。

「おい、オマエ！金を置いていけ！」

相手は銃を持っているような気配がした。後ろは見れない。サミュエルは30メートルくらい向こうにいた。

「OK… 財布はバッグの中にあるんだ」

「ゆっくりと下ろして、こっちに投げろ。後ろを向くな！」  
2人、3人？ いや、2人までだ。

肩からリュックをゆっくりすり下ろす。そのまま急に後ろに向いて僕は1人に向かってバックを下から投げつけた！ 同時にもう1人の足をひっかける！ もんどりを打って1人はひっくりかえった。

「うわっ！」

「Shit! 何しやる！」

僕はそのまま彼らの後ろに逃げた。幸いなことに銃は持ってないのか撃ってこない！

「待て！」

自分たちの後ろに逃げられたのが、意外だったのか、追いかけてくるのに時間がかかった。ように僕には思えた。

そのまま僕は暗闇の中を走った。

はあ、はあ、はあ、はあ

サミュエルはきっと気づいただろう…

どうしようか？バス停に戻るのには危険だろうか？物陰に隠れながら僕は考えた。

何となく嫌な気配だ。あの二人はこのあたりに詳しそうだし、深夜バスの旅行者を狙う常習犯みたいだ。もし仲間なんか呼ばれたら大変だ。

僕は通りに出た。

少しでも人に紛れたかったからだ。でも夜中の1時すぎに、ダウンタウンの通りにいるのは酔っ払いや麻薬中毒者のような人間ばかりだった。

今にも何かされそうな緊張感に耐えながら僕は通りを走った。こんな時ほど人を惹きつける僕の容貌をうらむことはない。

パン！パン！

その時銃声が鳴った。

振り向くと、右後ろの通りで黒い影が呻いている。

「タクミ！」

「サミュエル？！！」

どうやらサミュエルが撃つたらしい。うずくまっている影はさっきの男のうちの1人みたいだ。

「逃げるぞ」

「うん」

「こっちだ！」

「えっ」

「これに乗れ！」

男が乗っていたと思われる車がそこにあった。サミュエルと僕は乗り込んだ。

どこで覚えたのかサミュエルは車を急発進させてダウンタウンを横切った。

「このまま街を出るぞ！」

僕たちは夜の街をぶっ飛ばした！！！！

「えっと、えーと、そのまま通りを出たら南下して！インターステイトに出る！」

「南下？どっちだ！」

「うーと、左！」

標識を見ながら、記憶の地図をたぐり寄せる。地の利がない場所では大通り、大通りと道を辿っていくしかない。

セントルイス  
ST LOUIS

この文字の標識を見てやっとな僕たちは息をついた。

「サミュエル、運転できるんだ」

「まあな　タクミだってもう仮免取ってるんだろ？」

「いや、僕はまだだよ」

「…大丈夫？」

「オレの腕は確かだぜ」

確かにサミュエルは運動神経は抜群だし、運転もうまかった。ただ僕は色々心配になってきた。

「オレが銃を持ってたのが気に入らないのか」

サミュエルが僕の心を読んだように言った。

「いや、そんなことないよ。さっきは本当に危なかったし…　サミ

ユエルが助けてくれなかったら僕は今この世にいなかった」

「…親父の銃　持ってきたんだ」

「…」

「オレは撃ったことを後悔してない！オマエは絶対を守るんだ…そのために人を殺しても構わない！」

きつと結んだ薄い唇にサミュエルの決意が現れていた。僕は急に泣きそうになった。

「…ごめん…」

「あやまるな」

こんなに広い世界なのに、僕たちは暗いハイウェイをどこまでも走るだけなのに、僕はすごく嬉しかった。

母へ

ペンシルバニア州フィラデルフィア!!!

かつてはアメリカ合衆国の首都でもあったフィラデルフィア！ニューヨークから車で1時間半位で着くフィラデルフィアは合衆国建国にまつわる歴史的な場所が数多くある。

ダウントウンの中心に市庁舎がありインディペンデンス公園や星条旗を最初にデザインして縫った女性・ベッツィ・ロスの銅像があったりする。

ギリシャ語で「兄弟愛」を意味する都市を僕とサミュエルが訪れたのは運命的な気がした。

「F M F 財団、ここだ」

サミュエルのお母さんがここで働いているらしい。もともと、数年前の情報なので彼女がいるかどうかは分からないけど。

車を近くのマーケットの駐車場に乗り捨てた僕たちは埃まみれでその建物の前に立った。

リン

受付のベルを押すと中から人の良さそうな中年の婦人が出てきた。

「どのようなご用件ですか？」

サミュエルはお母さんの名前を出して、ここにいるかどうか尋ねた。

息子だということも話してみる。彼の声が震えているのが分かった。

「ええ、と。少しお待ちください。……いませんね。もう今うちの財団にはおられないみたいですね」

「何年か前の名簿は分らないのですか？」

僕はたまらずに口をはさんだ。

「ちょっと待ってね。うーんと、そうだわ！アグネスに聞いたら分かるかも！アグネスは名簿の係りなのよ。連絡してみるから、そこに座って待っててちょうだい」

急に婦人は僕たちにくれた口調で言った。この人たちは女性団体だけあって、ボランティア精神も持っているようだ。普通のオフイスならこうはいかない。

「連絡がついたわ！」

アグネスは古い記録から、サミュエルのお母さんの住所などを調べてくれた。

「ただ、こういった事はややこしいんで、オフィスに来てもらうことにしたの。いいかしら？」

「…はい」

直接住所や電話番号を教えることは出来ない、ということだ。サミュエルが本物の息子であつても事件などにならない可能性はないわけではない。

数年前に捨てた息子　憎まれていて当然だ。

サミュエルのお母さんはどんな気持ちでアグネスの申し出を受けた

のだろう。

サミュエルは気分が悪そうだった。顔色が悪かった。1時間半ほどして、僕たちの待つカウンセリング・ルームにサミュエルのお母さんはやってきた。

澄んだ目をした…サミュエルと同じ美しい金髪の女性が現れた。もつとくたびれた感じかと想像していたが、彼女はつらつとしたオーラを纏って登場した。その印象は16歳のオーロラ姫の残像を確かに残っていた。

ただ、サミュエルに会うことにはひどく動揺した様子だった。

「サミュエル！！！」

彼女はサミュエルを見るなり、目にいっぱい涙を浮かべて呼びかけた。

「大きくなつたわね」

「……………」

サミュエルはどう言っているかわからないらしく、ぼうと立って彼女を見ていた。

「ごめんなさい、ごめんなさいね　あなたを忘れていた訳じゃないのよ…　でも、どうしてもビリーに会うことは出来ないの」  
ビリーというのはサミュエルの父親だ。

サミュエルは両手を少しひらいたまま悲しそうな顔をした。

「おかあさん…」



「…？」

「どうして僕を向かえにきてくれなかったの？」

「そ、それは…」

「僕をキライだから？お父さんの子どもだから？」

「ちがうっ、違うのよ！ サミュエルを愛してるわ。一日だってあなたのことを忘れたことなんてなかったのよ！」

「だったら、どうして僕も連れていってくれなかったの！！！」

サミュエルは絶叫した。

「どうして！？ 僕を捨てたの？ 捨てられても僕はあれからずっと待っていた。お母さんが向かえに来てくれるの、ずっと待ってたんだ！なのに、あなたは来なかった！」

サミュエルのお母さんは口に手をあて泣いていた。

「ごめんね」

彼女はもはや倒れる寸前だった。

「ごめんなさい あたしが悪いの サミュエルから逃げたんだわ…自分を守ることしか考えてなかったのよ…きつと…」

彼女は真っ青になりながら続けた。

「あなたも連れていきたかった。でも私には自信がなかったの。子どもを連れて生きる自信が… ジミーから逃げるのに必死だった。きつと私は頭がおかしかったのよ…」

「」

サミュエルも父親の母への暴力を思ったのだろっ。沈黙は彼女への

共感の一部だった。

「あれから、私は流れに流れて色んな仕事をしたわ。そりゃあ、もう地獄のようだったわ。だからあなたを連れて来ずに本当によかった、と思った。」

「」

「でもそれは言い訳にならないわ。最終的にフィラデルフィアで私は女性の社会的圧力を救う団体に助けられたの。ここに来たのも、その関係者に紹介してもらったからなの」

「いまは…」サミュエルが口を開いた。

「何をしてるの？」

「今は…もつと小さな事務所で働いているの。ボランティアもするよな事務所よ」

「か 家族は？」

かすれた声でサミュエルは聞いた。

「……夫と 息子がひとり」

景色が

真っ白になった

お母さんには、息子がいた

彼女の愛はその子が独占している

もう、これ以上聞くことはなかった

「そう……」

サミュエルはとても優しい声で返事をした。

「サミュエル…… ねえ、何とか言って！ひどい、とか憎んでやる、とか……！」

「そんなこと言わないよ」

「そうだわ、うちに来ない？来てちょうだい！！だってあなたは私の息子だもの！ね！ 大丈夫、今度の夫はとても優しい人なの！受け入れてくれる、もちろん殴ったりなんかないわ！」

お母さんはほとんど錯乱していた。

「お母さん」

「なに？！」

「よかつたね……」

こんなに優しい顔をしたサミュエルを僕は初めてみた。悲しい、悲しい優しい顔だった。

ああっ！とサミュエルのお母さんは泣き出した。

「お母さん、ひとつだけお願いがあるんだ」

「……？」

「僕を抱いてくれない？それで”サミュエル、おまえを永遠に愛している”と言って欲しいんだ」

「サミュエル……!!」

その瞬間、こらえきれないように彼女はサミュエルを抱きしめた。

「サミュエル…サミュエル……」

「あなたは私の子、私の子　永遠に愛しているわ…永遠に愛してる…」

僕は

泣いていた

こんなに…

悲しい光景をみたことがなかった…

## 崩落

僕たちは空港に立っていた。

馬<sup>マ</sup>に電話するとフィラデルフィアまで飛んできたのだ。彼女にこっぴどく怒られたあと、僕たちはロサンゼルスに帰る飛行機に乗せられた。

あれからサミュエルは何もなかったように僕に口を聞いたが、意識が完全に飛んでいた。僕はとても心配だった。帰ったら精神科医<sup>シュリンク</sup>に見せないといけなにかも…

でも、そんなことは彼が受け入れるとはとても思えなかった。

これは絶対に日本に連れていくしかない！！ サミュエルのお父さんとも対決しないといけない。サミュエルは僕が守るんだ！

僕は脅迫的にそう思いだしていた。

「タクミ…」

「ん？」

「ありがとな…」

「何言ってるんだよ！」

そして、

サミュエルは家に帰っていった。

どうしてもひとりになりたい、自分の部屋に帰りたい、と言つのを

引き止めることは出来なかった。

- - - - -  
- - - - -

「じゃあ、Mrアキヤマ！サミュエルを向こうの道場に紹介してくださいさるんですね！」

柔道の師匠・アキヤマに僕は今回の件を話しに行った。彼は前からサミュエルを息子のように思っていたし、日本に行きたい、という僕の考えに賛成してくれたのだ。

「ああ、サミュエルのことは前から気になってたんだ。タクミがい考えを出してくれてよかったよ」

その言葉を聞いて僕は喜んで家に帰った。  
そんなときだった。事件は起こった。

それは… 世界の終わりだった。

サミュエルがローラをレイプした。

!!

僕は死にたかった… この世は地獄なのか？

どうして、どうして、どうして、どうして、どうして、  
どうして、どうして、どうして

何百回と聞いた、でも運命は答えてなんかくれない！

最初に聞いたときは嘘だと思った。警察につかまった彼をみてもやっぱり信じられなかった。だってサミュエルは優しく微笑んでいたし、悲しそうな瞳は変わらなかったもの。

ローラのお姉さんが僕んちに来てなにか言っていたけど、僕はよく分からなかった。僕のせいだとか何か言っていたようだけど…

僕のせい？

なんでだろう？

よく分からない。

いったいローラは何をしたんだろう？

- - - - -  
- - - - -  
- - - - -

「拓己…」

母さんの声がした。

「？」

「拓己」

ベッドのそばに母さんがいた。

「あれ？いつ帰ってきたの？」

「いま。…大丈夫?…」

急に涙がこぼれた。後から後から溢れてくる。

そのまま母さんは僕を抱きしめてくれた。

「大丈夫、大丈夫だからね」

「た、たいへんなんだ　こんな　母さん、サミュエルを助けて  
…　彼は悪くないんだ　悪くない　きっと何かあったんだよ

僕、助けないといけないのに　どうやったらいいのか　分らないんだよ…」

しゃくりあげながら母に訴えた。

「そうね。ゆっくり一緒に考えましょう。拓己ひとりで背負うこと  
ないのよ」

「でも、でも、早くしないと、…サミュエルは犯人にされてしま  
うよ　」

「　きつと、いい方法があるわ　私はこういった時のために勉強  
してきたのよ。任せておきなさい」

「　」

「さあ、これを飲んで寝なさい。お母さんがここについているから  
母さんはそうして睡眠薬を僕にくれた。

僕は幸せだ。

サミュエルはお母さんがいないのに…　あの寒い留置部屋にひとり  
でいるんだろうか。

ああ、サミュエル…　　可愛いそうに!!!

そう思うと涙があふれて止まらなかった。



きつと彼はお母さんに2度も捨てられたことが悲しくて悔しくてや  
ったんだ！自分も周りも女の人も傷つけたくてやったんだ。ロー  
ラのばか！そんな時に何言っただよ！？

深い悲しみの中、サミュエルの金髪と星の王子さまの倒れた姿が重  
なってみえた。

- - - - -

ローラは「もうタクミに会わないで」と言うためにサミュエルに会  
いにいったらしい。

なんで、そんな事を言うのか分からない！？ローラには関係のない  
ことだ。

…いや、分かっている。ローラの嫉妬だ。ローラは僕が好きだった  
んだろう。

そんなローラを僕は激しく憎んだ。あんな状態のサミュエルになん  
てことを言うのか！？僕があんなに気をつかっていたのに！ぬく  
ぬくと育ってきたオマエなんかサミュエルの悲しみと憎しみが分  
かってたまるかっ！

そして…

サミュエルはローラが好きだったという事実も僕を打ちのめしてい  
た。僕も嫉妬に狂っているのかもしれない…

## 愛と憎

激しいローラへの嫉妬に苦しんでいた僕の気が変わったのは、事件後のローラを見てからだった。

彼女は完全に打ちのめされていた

ご飯も食べない、水も飲まない、返事もしない、ただ点滴をしてベッドに寝ているだけだった。

廃人のようだった

僕は涙が止まらなかった

「これがレイプということよ」  
母さんが僕に言った。

「確かに彼女の行動には問題がなかったとはいえない。……けど、これほどヒドイ目に合うようなことはしてないはずよ サミユエルは彼女を殺したのよ……」

「  
」  
僕は何も言えなかった。

「レイプはね 性欲だけでするんじゃない、と言われているわ。それは拓己は分かっているわよね」  
僕はうなずいた。

「社会への復讐、とも言える。一番征服しやすい女性をターゲットとする卑劣な行為なのよ。ここからは本人たちへのカウンセリングになるけど、サミュエルはまずローラに対して元々性的な興味を持っていた、第二に父親からDVを受けていた、第三に母親の愛情の希薄さ、飢え、これは今回の事件に大きく影響している」

「そうなんだよ！サミュエルはお母さんに復讐したかったんだよ」

「それだけじゃないでしょ、そんな単純じゃないでしょ！？」

僕は黙った。

「あなたよ！拓己！」

「え？僕？」

「あなたも関係あるのよ！」

僕は何のことが分からなかった。

「あのね… サミュエルはあなたが好きなのよ。でもあなたを憎んでもいるの」

「僕を？」

「分かるでしょう？あなたは一番近くですべて持っているでしょう？それをサミュエルがどう思っていたか分かる？」

「……」 分かる。バンドを組もうと言った僕をあんなに責めた彼の悔しさ。

「今回の旅でサミュエルの心はまっぴたつに分離してしまったの。あなたを愛している、けど憎んでいる。この不安定さ！」

「でも それは」

「そんな時にローラが来て”タクミと私は何回も寝たわ”と言われてごらんなさい」

!!!!!!!!!!!!

「じゃあオレともしろよ、となっても不思議じゃないの」

そんな嘘をローラは言ったのか？

「むずかしいわ 今回のケースは。サミュエルの心が分かるだけに…彼のセクシュアリティもね。あと、最後にこれだけ言うておくわ。拓己、サミュエルはきつとあなたと共有したかったんだわ。」

「共有？」

「ローラもね。これは彼の一番のエゴ」

なんてことだ！！！

彼の激しさ思った…

僕は、僕は、どうしたらいいんだろう…

## 劣等感

僕には時間が必要だった。

カリフォルニアの空と空気をじっと感じる必要があった。バルコニーに出て僕はロサンゼルス町を見下ろした。夏の風が吹き付ける。

このままサミュエルは公判が決まって少年刑務所にいくんだろう。その間にいろんな支援団体が入って被害者・加害者共に再生プログラムが適宜実施される。

母さんに聞いた限りでは、少年のレイプ犯罪は5年から13年くらいの実刑だと聞いていた。今回の場合は悪質性が低いのもっと短いかもしれない、とも聞いた

けど… ローラの状態をみたら軽いと思う。サミュエルを助けたいと思っても状況をみるとそうも言えないのだ。

人殺しのほうがマシかもしれない　ローラは以前のように笑ったり、怒ったり、出来なくなつた。自殺する危険性があつた。

ローラは正義感の強い女の子だった。ボランティア活動に積極的にかかわっていたし、小さい子の面倒もよくみて本当にいい少女だった。彼女の輝ける未来は今暗く閉ざされてしまった。

母さんに憧れてブルネットの髪を長く伸ばしはじめていた、とも聞いた。

ローラは生きながら殺されたんだ。

「Mrアキヤマがサミュエルの保護責任者になってくれたわ」  
母さんがリビングに入ってきた。

「じゃあ、僕も会えるの？」

「それは無理」

やはり…当分は弁護士やカウンセリングチーム、そして保護責任者くらいしか会うことは出来ない。

でも、Mrアキヤマでホッとした。

「拓己」

思い余ったように母さんが口をひらいた。

「あなたがサミュエルのことを気にするのは分かるわ…でも、もうあなたにはどうする事も出来ないのよ」

「そんなことない！」カッとなった。

「そんなことない！！絶対に何かあるハズだ、僕に出来ることがつ！」

「」

しばらく見つめ合った。

母は目を伏せた。

「確かに 長い目でみたら、あなたに出来ることはあるわ。でも、今のあなたはサミュエルから離れないとダメだと、母さん思う」

「なんで！？」

「あなたもサミュエルも一緒にいたら更に傷つくから」

分かっていた

もう、ふたりで心のバオバブを見られないこと

サミュエルがもう今までのように会ってくれないだろうこと

それを認めたくなくて僕は、、僕は、、

「ねえ、拓己　日本に行こう　あなたのもう一つの祖国をみるのよ。サミュエルが行きたがってた日本をみるのよ。それがあなたの責任だと思うわ」

「責任？」

「そう。直接サミュエルを救うことは今は出来ないけど、将来はきっと役に立つわ。サミュエルと同じような子供が日本にもいっぱいいるの。」

あっちの方が表面に出ないぶん根が深いわ。そこであなたは勉強して。日本のサミュエルをどうしたら救えるのか」

「僕、出来ないよ　母さんみたいに立派じゃない　それに頭がいっぱいなんだ。人のことなんて救えないよ！僕は自分のことだけいっぱいさ」

「　そうね　」

ふわりと風が母さんの髪をやさしくなでた。

どうしてこの人はこんなに綺麗で強いんだろう。そしてすごいんだ

ろう。こんな人が僕の母親なんて奇妙な感じだ。

そして、フツと実感した。

サミュエルの気持ち。

母さんみたいになりたい      けどなれない。

それと同じで、どう頑張ったって彼は”タクミ”になれない。目にみえるものばかりで見たら、僕にかなうものがない気持ちは敗北感につながる。

自分がちよつと怖くなった。だって今の僕は母さんがつくったんだもの。出来が悪くても、僕は母さんの子だから、やっぱり普通じゃないと思う。

そんな僕を愛したらつらいのはサミュエルだ。

隣にいるのがつらくない訳がない。『オレはタクミを守ってやるものがなにもない！オレはタクミより何もかも劣ってる』てね。

でもね、僕へのコンプレックスなんて錯覚なんだよ みんな  
”見えている”ものばかりに対してじゃないか

心の目でみてごらんよ

サミュエル



## 金色のひかり

少年刑務所に送られて、1ヶ月ほどたってやっと面会が出来るようになった。夏休みも終ろうとしていた。

弁護士のロバートソン、Mrアキヤマ、母、そして僕。母はこの間日本とロスを何度も往復していた。仕事が忙しい様子だった。

カフェテリアで会えるようになっていた。開放的な雰囲気にな少し驚いた。

「お忙しいところありがとうございます」

サミュエルは少し痩せたようだったが、顔立ちはスッキリとしていた。ちょっと大人になったように見えた。

ひと通り近況やこれからの状況を話してから、僕たちはふたりにしてもらった。

母とアキヤマはロビーで待っていた。

「Hi!少し痩せたんじゃないか、タクミ」

「サミュエルだって　ここのご飯おいしくない？」

「ああ（苦笑）　確かに…　でもジャンク（フード）　抜けして丁度いいよ。」

さわさわさわ　　少し伸びた金色の前髪がサミュエルの睫毛の上を泳いだ

「もう、来るな」

サミュエルは何の感情もこめずに言った。

「もう、ここへ来るな、タクミ…」

「」

僕は予感していた

きつと今、銅像のような顔をしているのだろう。

「オマエのそんな顔を見るのはたまらないんだ。」

「ふふ」自嘲気味に笑った。

「そんな女神のような顔で微笑まれたら、たまらない」  
「？」

「最初に会ったときはびっくりした。オーロラ姫は本当にいるんだ  
と思った。でもオーロラ姫はなぜかオレと同じBoyでしかも何で  
も出来るスーパーマンだった」

「」

「オレは困った… 高嶺の花のオーロラ姫といられるのは本物の王  
子だけだから。でも オレは王子にはどうしてもなれなかった  
つらかったよ」

「サミュエルは」  
「僕は口を開いた。」

「気付いてないかもしれないけど サミュエルは王子だったんだ  
よ」

「？」

「僕もロイもディビットもどうしてサミュエルについていったと  
思う？どうしていつもリーダーだったと思う？柔道教室でヒーロー

だったのは誰だと思う？

エリックたちとケンカして負けても負けても最後に勝ったのはなん  
でだと思う？ 僕を守るため人を殺してもいいと思ったのはなんでだ  
と思う？」

「

「Mrアキヤマが親がわりになってくれたのは何でだと思う？」

「

「みんな、みんなサミュエルが皆に優しくかったからじゃないか？ 弱  
いものを守って闘ってきたからじゃないか？」

サミュエルは泣きそうな顔になった。

「サミュエルは王子の種をちゃんと持ってるんだよ」

僕は彼から目をそらさなかった。

「僕たちはまだまだ子どもなんだから成長する。その成長の速度は  
きつと色々なんだ。一部とって僕と比べたってそれは意味のないこ  
となんだ。」

僕といてひけめを感じるなら、そのひけめを上回くらいサミュエル  
のいい所を伸ばしていけばいいんだよ」

「でも オレはローラに」

「

僕はひと呼吸した。

「聞いてると思うけど 僕とローラは何もなかったんだ」

彼は小さくうなずいた。

「…オマエとSEXしているローラとSEXしたかったんだ…  
うしても…」

「  
」

喉がつまるような甘い気持ち僕の中から湧いてきた。

僕とサミュエルが直接的な関係になれないのは、お互いの性嗜好セクシュアリティの  
せいなんだろうか？

SEXできれば、ラクだったね

未熟すぎて僕達の性はまだまだ分からないことばかりだ。。。

「また、会おう  
」

「来るなよ  
」

「違うよ… もっと大人になったらさ。そしたら僕たち2人でSEX  
Xできるかもね。もっとも僕がおっさんになってたら、ゾツとして  
サミュエルは逃げ出すだろうけどさ（笑）」

「タクミはならないよ  
」

ならないよ。言葉には出さなかったけど、そう決意した。

「はい  
」

僕は”星の王子さま”をサミュエルに手渡した。

「これ、サミュエルにあずけておくよ… あの木の前で話したこと、  
忘れないで」

震える手で受け取ったサミュエルに、僕はにっこり笑って席を立った。

そして、そのまま彼から立ち去った。

「タクミ！」

サミュエルは立ち上がって叫んだ。

「バオバブに似たあの木 背中を合わせて話した時間、オーロラ色の  
星空 オレは忘れないから！」

「僕も。僕も同じ本を読むたび… 金色の星をみるたび… サミュエルの  
金髪を思い出すよ」

振り向かず、後ろ手に振って僕はカフェテリアを出た。

さよなら、ロサンゼルス

僕は日本へ飛びだつ。

もっと強くてたおやかな人間になれるように。

母さんのようになれるように。

でも

忘れないよ。サミュエルと過ごした時間。

僕たちは、あの時間の宝物をもっている。それは確かなんだ。ほら、金色の町の光が僕の下にひろがる。

それは、サミュエルの髪の色だ。彼の心の色だ。

どこにいても僕はこの光の色をみると、君を思い出すんだ。

（完結）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9524b/>

---

残酷な女神・拓己

2011年10月3日22時39分発行